

無自覚美人な雪瀬さんが！今日もどこかで巻き起こす!?

第二話

白スラックスの奥、見えていたのは...わたしの.....!?

雪代 のあ

Yukinose Works

目次

◆プロローグ：始業前、雨とスラックスと私

——朝の支度、急な雨。濡れた白スラックスが...彼女の肌に密着していく。

◆第一章：見られていた、なんて知らずに

——取引先での挨拶中、張り付いたスラックス越しに...前も後ろも、その「全て」が透けていた……。

◆第二章：名刺より先に、届いていたのは、割れ目

——会話の中、彼女の下腹部は無自覚にぴくぴくと反応し始める。香り、湿度、視線——彼女の下半身に、すべてが絡みつく。

◆第三章：ガラスに映った自分を、私は知らない

——帰り際、ふと映った自分の姿。そこにいたのは、“見せつける女”だった。

◆第四章：お風呂上がり、タオル一枚の……

——ふと思出す。あの感触、濡れたスラックス、下腹部に残るじんわりした痺れ……。

◆エピローグ：この気持ちは、快感...それとも……

——翌朝、いつもの白スラックスに脚を通す。けれど身体だけが、昨日の続きを求めている。

主人公

◆雪瀬 奈央（ゆきのせ・なお）

22 歳／TMTM 株式会社 営業部新卒社員

【超絶美人／自覚ゼロのエロ事故体質／社畜の女神】

どこを歩いても振り返られる美貌、涼しげな黒髪セミロング、透明感のある肌、柔らかな目元、清楚で控えめな微笑。なのにどこか天然でおっとり、恋愛経験も浅く、性的知識は“そこそこ”止まり。ストッキングを履かない主義で脚がエロい。

洋服はトラブルの種。今日は真っ白でピッタリのスラックスに淡いピンクのローライズパンツ、濡れた布が引き起こす奇跡の透け。気づかないまま、男たちに無言の衝撃を与えていく“体質”。だけど誰も、彼女を責められない。彼女はただ、真面目に生きているだけ——その無自覚さこそが、罪。

- ・身長：163cm
- ・スリーサイズ：B84（C カップ）／W57／H86
- ・趣味：読書（純文学、恋愛小説）、部屋で紅茶を飲むこと
- ・特技：名刺交換がとても丁寧

◆上野 課長（うえの・かちょう）

45 歳／某中堅 IT 企業 営業部 課長

【目を逸らすのに必死な常識人／心は叫んでいる】

奈央を担当として迎えた初老の営業マン。既婚。若い女の子に浮かれてはしゃぐ……ことはできず、透けスラックスの奥に見える“生々しい真実”に息を詰めてしまう。社内の空気を感じ取りながらも、何も言えずに飲み込んだ“男の葛藤”を抱える。

- ・ 性格：基本真面目、ノリは軽いが奥手
- ・ 好きな言葉：「常識が一番、でも……」

◆松岡 係長（まつおか・かかりちょう）

37 歳／取引先のサブ担当／独身・趣味は覗き見レベル

商談中、奈央の下半身を見てしまった一人。上司に言い出せず、後輩にも言えず、ただ目が泳ぎっぱなし。心の中では絶叫と射精が同時に起きているが、表面上は「平常運転」を必死で装っている。

- ・ 性格：内気でオタク気質。だが妄想力は一級品
- ・ お気に入り AV ジャンル：パンチラ素人ナンパもの

◆その他・モブ男性社員たち

通路や応接室で奈央をチラ見した社員たち。誰一人声をかけなかったのは、“本気で見えていた”から。目が合うだけでドキドキし、内心では（なんで俺今日会社来たんだ……）と運命を噛みしめる。

- ・ 共通タグ：無言の性衝動／通勤ラッキースケベの受け身集団

プロローグ

始業前、雨とスラックスと私

六月の朝。

東京の空は、まだ眠たげに曇っていた。

——ぽつり。ぽつ、ぽつ。

都営新宿線・曙橋駅の地上出口に足を踏み出した瞬間、傘を持っていない彼女の頬に、小さな冷たい粒が落ちてきた。

「……あれ？ 雨……？」

その声は誰にも届かないけれど、まるで詩のように、耳に残った。

彼女の名は、雪瀬 奈央（ゆきのせ なお）。

TMTM 株式会社 営業部、新卒一年目。二十二歳。

この街のどこを歩いても、“彼女を見れば誰でも振り返る”。そんな圧倒的な美貌の持ち主でありながら——

その本人が、いちばんそれに気づいていない。

そして、そこにこそ、彼女の“美しさの核心”がある。

白いスラックス、上品なネイビーのブラウス。シンプルなパンプスに素足。営業職らしく整えてはいるが、決して飾りすぎないその服装が、かえって彼女のナチュラルな色気を際立たせていた。

ブラウスのボタンは第二まで閉じていて、襟元からのぞく鎖骨がほんのりと濡れて光っている。

白スラックスは、もともと伸縮性のあるストレッチ素材。彼女が動くたび、太ももに、腰に、お尻に、生地がぴたりと吸いついて動く。

——それは、濡れたことでいっそう鮮明に。

薄手の生地が肌に密着し、ラインを、奥の奥まで拾ってしまっていることを……彼女は、まるで知らない。

奈央は、美しい。

いや、美しいなどという単語では足りない。

清楚で、柔らかくて、無防備で、時折ふと見せる仕草がなぜか色っぽい。

髪は黒のセミロング。清潔感と艶やかさが共存し、濡れることでしっとり頬に張り付き、その艶めきが「無垢なエロス」に変わる。

肌は白磁のように明るく滑らかで、表情が変わるたびにほんのりと上気する。それがまた、見る者の理性をほどいていく。

身長は 163 センチ。モデル体型ではない。けれども、そのわずかな肉付きが、異様なまでに男の目を惹く。

胸は C カップ。「大きくない」と本人は思っているが、薄手のブラウスの上からでもわかる絶妙な丸みと柔らかさ。たわみではなく“形”で誘惑する、冷たくも熱を帯びた胸元。

そして何より——奈央の“無防備な歩き方”が、危うさをさらに引き立てていた。

足元を見ながら歩く。風に飛びそうになる髪を押さえる。小走りになって、ヒップが上下に揺れる。

そのすべてが、見せつける意図などないのに、どうしようもなく、艶めかしい。

「あっ……もうすぐ九時……！」

時間ギリギリになっていた。

営業先への“初訪問”——社会人としての初めての挨拶まわりだった。
奈央は、少しでも濡れた白スラックスを指でつまみ、小走りで交差点を抜けていく。

そのとき。彼女のスラックスの内側で、ある小さな“ズレ”が起こっていた。

下着。

今日のパンツは、シンプルな淡いピンク。レースも装飾もない、実用重視のパンツ。少し浅めで、腰骨の下に引っかかるくらいの股上だった。

——だが。

汗と雨で濡れた布が太ももと擦れ、ゆっくりと、じわじわと、パンツの縁がずれていく。

スラックスとお尻との間に滑り込み、ゆっくりと股下の奥へ丸まっていく。

そんなことには、当然、彼女は気づいていない。

ただ、小さな名刺入れを握りしめ、「緊張しないで、ちゃんと笑って」と自分に言い聞かせることしか、できなかった。

やがて、目的地のビルが見えてきた。

濡れたままのスラックスが太ももに張り付き、股間からヒップにかけて、妙な冷たさを感じていたが、それが「ヤバい透け方」であることに、彼女はまったく気づいていない。

（大丈夫、ちゃんと笑って……目を見て……）

口元に笑みを浮かべながら歩く彼女。

だが——そのときすれ違った中年のサラリーマンが、彼女の後ろ姿を見た瞬間、はっきりと喉を鳴らして目を見開いたことも。

ビルの前にいた若手社員が、振り向いたまま固まったことも。

受付の男性が、一瞬だけ顔を赤らめて目を逸らしたことも。

——奈央は、何一つ知らなかった。

それもそのはずだった。

彼女の白スラックスは、雨に濡れたことで完全に肌に貼りつき、奥にずり下がったピンクのパンツの影をくっきり浮かび上がらせ、割れ目の形そのものが透けて見えていたのだから。

そして、その下腹部はまるで呼吸するように、歩くたび、ぴくん……ぴくん……と、やわらかく震えていたのだった。

この日、初めての外回り営業へと向かった雪瀬奈央。
彼女の“運命”は、ここから始まる。

そのスラックスの下に、まさかあんな光景があるとは、彼女自身、夢にも思っていなかった。

——見られていた、なんて知らずに。

第一章へ、続く。

「見られていた、なんて知らずに」